みんぱく 私の逸品

# マザンキ

標本番号 H0146123
地域 ポーランド共和国
受入年 1986年

民博 外来研究員 マジェッツ・アグネシカ

一九八六年に、ポーランドからマザンキという楽器がみんぱくにやってきた。収集データには、一九世紀につくられ、ヴィエルコポールスカ地方である楽隊が使用していたことなどが書かれている。マザンキとは簡単にいうとヨーロッパの民衆のあいだでつくられ用いられていたバイオリンの原型のようなもので、ギコギコ荒っぽく演奏されることから、殴り書きを意味する「マザチ」ということばにちなんで、その名がついたらしい。そんなマザンキは、ポーランドにおいて文化的に重要であったばかりではなく、ポーランド人のアイデンティティを形成するもののひとつであると言っても、過言ではないのである。

一〇〇年あまり前に、シェンキェヴィチという作家が活躍していた。彼の文学作品のなかに、「ヤンコ君」という短編小説がある。それは、農村の貧しい生活を描いたもので、田舎の住民への教育の必要性を訴えるなど、当時の世相を反映した社会的作品であった。主人公のヤンコ君は一〇歳ぐらいの少年で、生まれつきからだが弱く、農業の手伝いなどは一切できなかったが、あるひとつのことに熱意をもっていた。どうしても本物のバイオリンを弾きたかったのである。バイオリンを手に入れる余裕がなかった彼は、木の塊を彫り、三本の弦を張って、自分なりのバイオリンをつくったが、その出来栄えはみすぼらしいものだった。その後、音楽にかけるかたくなな情熱はかえってヤンコ君に悲劇を招いてしまうのだが、読み手を感動させる物語であった。

シェンキェヴィチは一九〇五年にノーベル文学賞を受賞し、今日彼の文学作品は後世の母語教育の教材となっている。つまり、ポーランドで義務教育を受けた人は、ヤンコ君が彼の自作の「バイオリン」を弾いている場面が記憶のどこかに残っているのだ。したがってポーランド人であれば、みんぱくにやってきたこのマザンキを見て、きっとヤンコ君の楽器を連想するにちがいない。